

老舎研究会会報 第 21 号

胡絮青女士 題字

【ロンドン通信】

イギリスのお墓—老舎ゆかりの エヴァンスとリースのお墓を探 して

高橋由利子

1. まえがき

老舎は 1924 年に渡英し、ロンドン大学東方学院で中国語を教え、そこで小説を書き始めた。老舎のイギリス赴任に関わったのは中国でロンドン会の宣教師であったエヴァンスと、彼の義父のリースであった。リースは中国での経験と語学を生かし、ロンドン会を退職後、ロンドン大学東方学院の中国語主任をしていた

ところがこの 2 人は老舎の渡英の前後に相次いで死亡する。リースは 1924 年 8 月 4 日に死亡し、エヴァンスは 1925 年 9 月 13 日、滞在先のウェールズで死亡する。

この 2 人のイギリス人の相次ぐ死亡が老舎に与えた影響については前に書いたことがある。

しかし、ここでは現在私がサバティカルでロンドンに滞在中につきとめた 2 人のお墓の場所と、どのようにしてそれをつきとめたかということについて書いてみることにする。

2. お墓の見つけ方

お墓探しは簡単と気楽に考えていた。リース

の家はロンドン北部の Barnet にあり、エヴァンスもそこに住んでいた。死亡した年月日もわかっていないし、2 人ともロンドン会所属の宣教師であったから、どこかにロンドン会専用墓地があつて、そこに埋葬され、記録もきちんと残っていると思ったのである。

それで、ロンドン大学 SOAS (旧東方学院) の図書館の Special Correction Reading Room (以下 SCRR と略称) のスタッフに相談してみた。ここは Missionary Archive の中にプロテスタントの会派であるロンドン会の関係文書が保存されている。前回の在外研究時も利用したところであるが、今回も毎日そこに通り資料の再検討を行っていた。

SCRR は図書館の中でも特別な場所で貴重資料を管理し、資料の閲覧および複写には厳しい制限があつた。そのため今回は資料の収集にとっても苦労した。

ところが、今回は誓約書と申請書を出せばデジタルカメラで自由に資料の写真を撮ることができた。資料の収集という点ではだいぶ楽になり、またスタッフもたくさんいたので、ロンドン会の 2 人の牧師のお墓は、どうしたら見つかるだろうかと何人かに相談してみた。

しかし、意外にも、それはとても難しいという答であつた。ただ、お墓は、その人がどこで死んだかに深くかかわっているもので、2 人の家が Barnet にあつたのなら、その管轄の部署に問い合わせればよいと、可能性のあるいくつかのサイトを教えてくれた。

それで、そこにメールを出して問い合わせ

みた。しかし、答はやはり同じで、可能性のあるいくつかの墓地のサイトを教えてくれただけであった。

3. エヴァンスのお墓

エヴァンスはウエールズで水泳中に溺死したので、お墓の場所を知るのはとても難しいだろうと思っていた。ところが、意外にもこちらの方が先に見つかった。

義父のリースの資料の中に偶然、エヴァンスの死亡当時の様子が書かれた資料をみついたのである。

このリースの資料というのは、宣教師関係の資料でなく、ロンドン大学 SOAS 本部の資料であった。リースは SOAS の教員であったので、教員に応募してから死亡するまでの、在職中にリースが出した手紙とリースあてに来た手紙が大学の個人ファイルの中に残されていたのである。

この個人ファイルは、私が 1994 年に老舎のロンドンでの故居を調べた時、SOAS に立ち寄った際にも見たことがあった。当時これを管理していたのは大学の人事部門であった。いろいろと事情を話し、さまざまな部署を訪ねてやっとその資料を見せてもらえた時には残り時間が 30 分しかなかった。それで、その場で事情を書いた手紙を書き、私の論文の英文サマリーと名刺を添えて、このリース関係の手紙資料をコピーして送ってくれるよう申請して帰ってきた。

あまり期待はしていなかったが、後日コピーは送られてきた。しかも受け取りの手紙に、葉書資料の裏がコピーされていなかったと書き添えると、後で裏の部分も送られてきた。(この資料でわかったことについては前に老舎研究会で老舎故居のビデオとともに発表したことがある)。

その個人ファイル資料が今回は人事部管轄

から SCRR の管轄に移っており、私がリースのお墓を探していると相談したアーカイヴィストに、リースがここの教員でもあったと話すと、それならこの資料があるけれど、と持ってきてくれたものであった。

その時は、これは前に見たものであまり役にたたないと思っていた。しかし、せっかく出してくれたものであるし、コピーも持ってきていなかったのもう一度見始めた。驚いたのは、そのファイルに私の出した手紙、名刺、論文サマリー、あとで送ったリースの写真と一緒に保存されていたことである。当時のドタバタを思い出し、なつかしくも恥ずかしかった。

その中にリースの娘ジャネットの手紙があった。ジャネットの書いたものには、他にリースの死後、研究室に残したリースの本の引き取りに関するメモがあったが、直接、リースが書いたものではなかったのもう一度見始めた。驚いたのは、そのファイルに私の出した手紙、名刺、論文サマリー、あとで送ったリースの写真と一緒に保存されていたことである。当時のドタバタを思い出し、なつかしくも恥ずかしかった。

ところが、このジャネットは同時にエヴァンスの妻でもあった。その手紙はエヴァンスの死後に送られたものであり、そこにはエヴァンスの死亡のいきさつと、彼を葬った時の状況が詳しく書かれていた。

彼が葬られたのは

“ the little old parish church at Llanaber, only 200 yards from the sea”

であり、エヴァンスは彼が水泳中に死亡したウエールズの海の近くのラナバーという村の教会に埋葬されたことがわかった。



エヴァンスのお墓のある
St. Bodfan's (St. Mary's) 教会

4. リースのお墓

リースのお墓については結局 Barnet の地方資料館と関係墓地のサイトがわかっただけであった。しかし、地方資料館のサイトには当時の地方新聞のマイクロフィルムがあると書いて

であった。それで、その中の *Barnet Press* という地方新聞を調べてみることにした。リースは多分 *Barnet* の名士でもあったから、その死亡記事に埋葬場所も書かれているはずだと考えたのである。

地方資料館の担当者にメールし、閲覧の予約を取った。当日、2時間ほどかけてたどり着いた私に50歳くらいの女性職員はリースのお墓を探す理由を尋ね、長々と説明した後、やっと資料を見る段となった。ところがそこで始めて彼女はリースの死亡した年である1924年のマイクロフィルムだけが紛失していることに気付いた。引き出しにあるはずの1924年の分だけが無く「1924年は紛失」と書かれたメモが入っていたのである。彼女が私の申請時にチェックすればすぐわかったことであるのに。

彼女はあわてて、そのマイクロフィルムの原本は大英図書館分館の地方新聞センターにあり、ここはそのコピーであるので、原本に無かった可能性もあると主張した。そこで、その分館に問い合わせてもらった。原本には欠落は無く、あるという返事だった。幸いにも分館は地方資料館からバスと地下鉄を乗り継いで40分位のところであったので、急遽、そこに向かい、何とか閉館までに閲覧を申請することができた。

Barnet Press は土曜発行の週刊紙でその1924年8月9日第5面にリースの死亡記事 *Death of Dr. Hopkyn Rees. ———Distinguish Missionary, Scholar, and Linguist. ———* と題する記事を見つけた。その中の *The Funeral.* という項目の中に葬儀の行われる教会と時間、担当牧師と遺体の埋葬場所———*Bells Hill burial ground* が書かれていた。

そこはすでに調べていた墓地であったので、後日、電話で1924年8月4日に死亡した *William Hopkyn Rees* という人のお墓があるかどうか聞いてみた。5分後、確かにリースのお

墓があり夫人もそこに埋葬されていると返事が来た。見に行きたいと言うと、場所がわかりにくいので担当者が案内するという。2時間後に近くの駅の駐車場で待ち合わせるようになった。

その *Lin Baker* さんという60歳くらいの女性担当者は地下鉄の *High Barnet* の駅まで車で私を迎えに来てくれ、そこからさらに10分ほどの *Bells Hill* の墓地まで連れて行ってくれた。(途中リースとエヴァンスの家にも寄ってくれた)。



彼女は横長の大きく分厚い本を持っていたが、それはお墓の場所の記録簿で、これがないと広い墓地のどこにある

かわからないということであった。

それによるとリースのお墓は C-2 というエリアの 103 という番号だそうである。しかし、実際の墓地にはそのようなエリアや番号の表示はついていないので、*Baker* さんがその記録簿の地図のようなものを見ながら、だいたいこの辺だということと一緒に探した。

20分ほどでお墓は見つかった。墓地の奥の端の方に大きな十字架のお墓があり、十字架の上に大きく漢字で瑞牧師と彫られていた。



下の台座の上には *In Loving Memory of William Hopkyn Rees*、その下には *Missionary and Sinologue, born at Cwmavon, Wales, April 24th 1859, died at Barnet Aug. 4th 1924* と刻まれている。

5. あとがき

老舎が1924年秋、ロンドンに来たとき、多分、すでにリースは死亡していた。老舎はその時リースとエヴァンスの家の近くに住んだの

で、老舎が最初にしたことはこのリースのお墓参りであったかも知れない。お墓の十字架の上の瑞牧師という漢字はいつ誰が原書を書いたのかわからないが、老舎の字体に似ているような気がしないでもない。

Barnet Press にはエヴァンスの水泳中の失踪と、遺体があがったという続報との2つの記事もあった。(1925年9月19日、10月3日)

しかし、エヴァンスのお墓はウエールズでロンドンから遠いうえに、今回は4カ月で帰国するので、残念ながら行けなかった。しかしいつか機会を見つけ、かの地で老舎ゆかりの人物を偲びたいと考えている。

【上海通信】

上海の老舎—老舎とはゆかりのない上海の古書肆で老舎を探して

倉橋 幸彦

この夏三年振りに、学生の上海外国語大学夏季漢語研修の引率で、来滬の機会に恵まれた。

もちろん、この「恵まれた」というのは皮肉であることは言わずとものことであるが、「為学生服務」も大切ながら、学生諸君も少しは「自力更生」精神を学ぶべし。

しかも上海の夏は蒸し暑い。少し歩くだけでも全身汗まみれ。ところが、一旦建物に入るとこれでもかとばかりに冷房全開。この差の大きさに身体を慣らさない限り、上海の夏を乗り切ることにはできない。

それにしても、上海には「動力資源の節約」などという文字は存在しないのか。「中庸の道」が重要視される根本原因がこんなところにも現れているような気がしてならない。

とはいえ、ひまを見つけては上海の古書肆を

あちこちをめぐり、国内ではすっかりご無沙汰していた古書漁りの愉しみの本領を味わっている。この点では、前言は取り消して、やはり「恵まれた」と言わなければならない。

さて、上海の古書といえは「文廟」。ここで掘り出し物の探索が一流の獵書家の本道であろう。しかし、夏の露天は苦行そのものであるから、わたしの場合はもっぱら「インドア」派。それゆえ、非常に限られた範囲ではあるが、今回上海の古書肆で手に入れた老舎著書をいくつか報告しておこう。

まずは、初版本一冊。

『離婚』〔良友文學叢書第八種〕

上海良友圖書印刷公司（上海北四川路）

1933年8月20日初版、精装本。

この良友版『離婚』については、初版ではないものの、再版(1933年12月1日)と四版(1935年5月1日)の二冊をすでに死蔵しており、また古書肆の主人の言い値があまりにも高額だったこともあり最初は購入を躊躇。しかし、老舎直筆のサインが入っていたことにやはりあきらめきれず、思い切って買うことを決意。

ところで、この著者サイン入りの良友文学叢書については、倪墨炎の「趙家璧編《良友文学叢書》」(『現代文壇内外』1998年12月、漢語大詞典出版社、p188)に次のような件がある。参考までに引いておく。

這套叢書上海版39種初版本，都有一百作者簽名本，編號發售。這是主編趙家璧的創舉。丁玲的《母親》出版時，報上登出廣告，仍然發售一百本簽名本。特務們看了看傻了眼，特地良友公司尋衅，說作者已失蹤了，怎麼可能簽名，這簽名是假的。趙家璧拿出一包另一本書的作者簽好名的扉頁，打開請他們看，原來作者是事先簽名，再裝訂到書中去的。特務們只好悻悻而去。這套書的作者簽名本，現在已成為藏家的珍品了。

わたしが入手した「珍品」は、「編號」No. 27。

ついでながら、五年前の夏、わたしは上に引いた倪墨炎さんのご自宅に伺い、貴重な蔵書を見せていただいたことがある。そのうえ、帰り際には記念にと老舎の晨光版『老張的哲学』初版本（1948年1月）を頂戴もした。遅ればせながら、この場を借りて深く感謝いたします。

次に、『牛天賜伝』二冊。

a. 『牛天賜傳』

羣益出版社

民国 32 年 1 月 蓉版

211（最終頁は空白）頁。国幣 4 元 5 角。

「蓉」とは、言うまでもなく四川省の成都のこと。同書の表紙は、人間書屋版を踏襲。

b. 『牛天賜伝』

新豊出版公司（上海六馬路 14 号）

民国 35 年 2 月 滬初版、1500 部。201 頁。

同書の「書影」は張桂興『老舎著作編目』〔老舎研究叢書〕（2000年9月、中国国際廣播出版社）の冒頭の図版「老舎 30 年代創作的部分長篇小説書影」に載っているので参照されたい（ただし、本文では同書に関する記載が見られないが）。

老舎は先ず民国 35 年 1 月に『火葬』を、続いて翌年 2 月に『東海巴山集』と同書を、やはり新豊出版公司から出版している。これからすれば、老舎と新豊とは深い関係にあったと言えるであろう。

a・b 共に、首都図書館編『老舎研究資料編目』（1981年8月、北京市図書館学会）の「老舎著作分類目録 図書部分」に記載があるが、a については「成都 羣益出版社 1943 年」と記すだけで、出版月の「1 月」は省略されている。また、同『老舎研究資料編目』によれば、b には「1947 年 1 月」再版本があるとのことである。

なお、『牛天賜伝』と言え、これも何年前かにやはり上海で手に入れた「盗版」（康徳 9 年 12 月 1 日再版、啓智書店（新京））もある。

因みに、老舎著作の盗版については、先に挙げた『老舎研究資料編目』の「冒名、盗版書目」が比較的詳しいが、この啓智書店版は採られていないことを附記しておく。

ところで、この小文の題名に「老舎とはゆかりのない上海」などと付したが、老舎著書の出版という意味では、前述の新豊出版公司ばかりでなく上海出版業の興隆を抜きに語ることはできない。30 年代から 40 年代にかけて老舎の著書を出版した商務印書館・生活書店・良友図書印刷公司・開明書店・上海雜誌社・文化生活出版社・晨光出版公司・恵群出版社等すべてが上海の出版社である。

老舎と上海の出版社との関係については、今後の課題の一つとして視野に入れる必要を再確認した次第である。

最後に、もう一冊。これは古書でもなければ、老舎の本でもないのだけれど、蛇足まで。

趙曉楊編訳『北京研究外文文献題録』

北京図書館出版社、2007 年 5 月

同書は、著者の「導言」に「将介紹筆者所見の 176 種有關北京的歷史文化、政治經濟、民衆生活、文学戲劇等的外文書籍、每種書包括出版時間、版本更迭、内容簡介、目錄翻譯、圖書頁碼、照片圖片、作者生平及著述介紹、中文訳本等基本介紹」とあるように、中国ではめずらしく書誌情報の行き届いた「文献解題目録」である。

しかし、その書第十三章「訳成外文の中文書籍」142 頁に、次のような記述がある。

駱駝祥子 (*Yellow Storm*)

1948 年蒲愛徳協助老舎先生将《駱駝祥子》翻譯為英文，1951 年由紐約 Harcourt, Brace and Co 出版社出版，題名《黄色風暴》，共 533 頁。

これを、はたして瑕瑾と見逃すことができようか。

(2007/08/12 上外迎賓館にて)

『老舎全集』所収「駱駝祥子」 校読（3）

小生 常談

[第 7 章]

- ①【全集】他自居为“社会主义者”，有时候也作些别的事的一个中等人物。

(第 60 頁正 9 行)

【人間】他自居为社会主义者，有时候也作别的事的一个中等人物。

(第 78 頁正 2 行)

[按語]：「“ ”」の挿入は、【人民】に基づく。

- ②【全集】她是三十二三岁的寡妇，干净，爽快，作事麻利又仔细。

(第 63 頁倒 11 行)

【人間】她是三十二三岁的寡妇，干净，爽快，作事马力又仔细。

(第 82 頁倒 4 行)

[按語]：「馬力」→「麻利」は、第 6 章の④同様【文集】に基づく。【人民】は「麻力」と表記する。

*この異同は表記の規範として処理すべきかもしれない。待考。

- ③【全集】祥子的心中很乱，末了听到太太说怕血，似乎找到了一件可以安慰她的事；(第 65 頁倒 11 行)

【人間】祥子的心中很乱，末了听到太太说怕血，他似乎找到了一件可以安慰她的事；(第 85 頁倒 6 行)

[按語]：「他」の脱落は、【晨光】に基づく。

<注>：なお、「驚悶」→「慙悶」等の表記の規範に関するものは採らなかった。

[第 8 章]

- ①【全集】起会，会这个穷年月，常有哗啦了的时候！(第 71 頁正 11 行)

【人間】起会，在这个穷年月，常有哗啦了的时候！(第 92 頁倒 3 行)

[按語]：【全集】の「会」は明らかな誤植。

- ②【全集】祥子愿意早早的拉车跑一趟，……。(第 72 頁倒 3 行)

【人間】祥子愿意早早的拉车跑一喘，……。(第 94 頁倒 4 行)

[按語]：「喘」→「趟」の誤植の訂正は【晨光】に基づく。

- ③【全集】驶汽车的觉得有失身份，要是和汽车夫们有什么来往。

(第 74 頁正 14 行)

【人間】驶汽车的觉得有失身份，要是和汽车夫说有什么来往。(第 96 頁倒 1 行)

[按語]：「說」→「們」の誤植の訂正は、【晨光】に基づく。

- ④【全集】这么想好，他轻轻的摇了摇那个扑满，想像着再加进三十多块去应当响得多么沉重好听。

(第 75 頁倒 8 行)

【人間】这么想好，他轻轻的摇了摇那个扑满，想像着再加进卅多块去应当响得多么沉重好听。

(第 98 頁倒 7 行)

[按語]：「卅」→「三十」は、【人民】に基づく。なお、【全集】における以下の「卅」→「三十」の書きかえ例は略す。

<注>：なお、「驚不住」→「慙不住」・「打膈」→「打嗝」等の表記の規範に関するものは採らなかった。

[第 9 章]

- ①【全集】祥子不敢正眼看她。

老舎関係文献略目 (11)

倉橋 幸彦 (編)

【2004年〈上半期〉】

石井康一「老舎研究ノート——「茶館」訪日公演20周年に——」

『言語と文化』(甲南大学国際言語文化センター) 第8号 (3月15日)

p. 175—181

□相声「乱形容」の訳 (p. 180—181) を附す。

* 「人々の生活に旧時代の歴史を象徴させる『茶館』は深い寓意と象徴性を持つ。老舎は王利発・秦仲義・常四・康順子の四人を若い頃から老年まで全体を通して出る最も重要な人物とし、「次に重要な人物」は親子二代を一人の俳優が演じることにした。たとえば小劉麻子のように、第三幕に登場する彼らの二代目は親の呼称に“小”の一文字を加えただけで記号化されており、揃って悪人の側に立ち、親の職業を受け継いで発展させている。「生活の中では必ずしも息子が親の職業を継ぐとは限らない」と自ら言うにもかかわらず敢えてそのように設定した構造に、老舎は悪の繁栄する旧時代を象徴させている。一方、王利発は茶館を乗っ取られて自殺を決意し、秦仲義の一生の事業は没収されて無に帰し、常四は「私は自分の国を愛したよ。でも誰が私を愛してくれたかね」と祖国に絶望する。また、だんだん大きくなり数も増えていく「莫談国事(政治の話はお断り)」の貼り紙は、時の権力者が変わっても民衆が政治の話をする自由がない状態は変わらず、ますます過酷になることをしめす。しかし『茶館』の寓意と深い象徴性は理解されず、発表当時は革命の描き方が足りず、結末が暗いなどの批判を受けた。58年、63年の上演時には、批判に対応して大きく手直しを行なった。『茶館』が本来

(第 76 頁正 3 行)

【人間】祥子直不敢正眼看她。

(第 99 頁正 3 行)

[按語] : 「直」の脱落は、【人民】に基づく。

②【全集】他一时蒙住了。(第 77 頁倒 12 行)

【人間】他一时猛住了。(第 101 頁正 4 行)

[按語] : 「猛住」→「蒙住」は、【文集】に基づく。

③【全集】“这不结啦!甭找不自在!”她撇开嘴,露出两个虎牙来。

(第 78 頁倒 6 行)

【人間】“这不结啦!甭找不自在!甭她撇开嘴,露出两个虎牙来。

(第 103 頁正 1 行)

[按語] : 「甭」→「」の誤植の訂正は、【晨光】に基づく。

④【全集】他必审问我,我给他个‘徐庶入曹营——一语不发’。

(第 79 頁倒 6 行)

【人間】他必审问我,我给他个徐庶入曹营,一语不发。(第 104 頁正 7 行)

[按語] : 「歇後語」の表記は、【人民】に基づく。

⑤【全集】祥子连头也没回,像有鬼跟着似的,几溜便到了团城,走得太慌,几乎碰在了城墙上。(第 80 頁倒 1 行)

【人間】祥子连头也没回,像有鬼跟着似的,几出溜便到了团城,走得太慌,几乎碰在了城墙上。(第 106 頁正 4 行)

[按語] : 「幾出溜」→「幾溜」は、【人民】に基づく。

<注> : なお、「弩出些来」→「努出些来」・「酒盃」→「酒碗」等の表記の規範に関するものは採らなかった。

の正当な評価を受けるようになったのは文化大革命終結後であり、老舎はそれを見ることはできなかった」（p.177）。

田中弥生『駱駝祥子』の会話表現に関する考察

— 小説と映画の比較を通して —

『人間文化研究科年報』（奈良女子大学大学院人間文化研究科）第19号（3月31日） p.141-151

◆はじめに／第一章 映画における口語化／第二章 北京語に関する表現／第三章 規範化／おわりに

* 「本稿では中国の現代文学作家老舎の初期〔★ママ〕の作品『駱駝祥子』をテキストとし、その小説と映画の比較から、現代中国語の会話表現とはどのようなものかを検討するものである」（「はじめに」 p.141）。

* 「使用テキストは『駱駝祥子』（『老舎文集』第三巻所収、人民文学出版社、1982年）と『撮影完成台本 駱駝祥子』（『駱駝祥子 電影的设计、施工和完成图谱』所収、上海文艺出版社、1984年）の二冊とするが、考察対象は小説の第一、二、十二、十三、二十四章を除く全ての章と、映画の対応部分の台詞とする。〔☆中略〕また映画『駱駝祥子』（凌子风导演・改编、北京电影制片厂、1982年）で台詞等を確認し、〔☆後略〕」（p.151<注>（1））。

弘田恭子『駱駝祥子』と老舎の女性観

『未名』（神戸大学中国文学研究室・中文研究会）第22号（3月） p.83-116

◆はじめに／一、祥子の墮落の原因／二、父と母の不在／三、幸せになれない祥子、母になれない女／四、虎妞と小福子、祥子と老舎／五、老舎の恋愛と結婚／六、頻出する性欲／七、成立しない「恋愛」／終わりに

* 「それは、老舎の小説中で恋愛が成立しない時だけでなく、老舎自身が、作品の中で恋愛を

描こうとしない時、どちらの場合にも、何らかの外的要因がきちんと用意されているということである。そして、その要因は常に何かしら壮大で有益な、崇高なものである。老舎が持ち出してくるのは、時に「天下国家」であったり、「民族性」であったりするのだが、恋愛を語らない理由としては、十二分に説得力を持つかにみえる。だが、「天下国家」を語ることと、恋愛を語ること、これは、そもそも相矛盾するものではないだろう。ここで老舎は「天下国家」という壮大な言説を持ち出すことにより、恋愛を語れないことから逃げているのではないだろうか」（p.110-111）。

* 「ここ〔☆『近代中国と「恋愛」の発見』、本誌第14号「老舎関係文献略目（3）」を参照〕で、張競は、老舎や多くの作家が恋愛を描くことをやめたのは、中国の近代小説にとって、「恋愛」がいつまで経っても「借りてきた首飾り」のように「窮屈」であったからだと述べている。だが、そもそも小説の中で恋愛が「窮屈」であるかどうかは、作家の手腕によるものであって、「天下国家」や「東方民族の圧迫」という外的要因によるものではない。結局のところ、老舎にとっての「天下国家」「民族性」などの崇高な理由は、「恋愛」という主戦場を降りる為の「大義名分」に過ぎなかったのだ」（p.111）。

杉野元子「老舎作品のテレビドラマ化をめぐる」

『藝文研究』（慶應大学藝文学会）第86号（6月） p.154-137

→『中国関係論説資料』第47号第2分冊（文学・語学）上（2007年1月31日）

◆ I はじめに／II 『四世同堂』／III 『二馬』、『離婚』、『駱駝祥子』／IV 『我這一輩子』／V おわりに

* 「中国テレビドラマは、文革終結後の20年余りの間に量的にも質的にも劇的な変貌を遂げ

た。本稿では、中国テレビドラマ研究の第一歩として文学作品のドラマ化の問題を取り上げる。具体的には老舎作品を原作としたテレビドラマにスポットを当てるのだが、老舎作品の中でテレビドラマ化されたものには、『四世同堂』（1985年）、『二馬』（1999年）、『離婚』（1999年）、『駱駝祥子』（1999年）、『我這一輩子』（2001年）がある。ドラマ『四世同堂』については、『「四世同堂」電視劇討論會文集』を始めとして数多くの論考が発表されているが、それ以外のドラマについてはほとんど論考がなされていない。またこれら5本の老舎原作ドラマを総合的に論じたものは、管見の限りでは見つからない。／そこで本稿では、老舎原作ドラマを年代別に①『四世同堂』、②『二馬』、『離婚』、『駱駝祥子』、③『我這一輩子』の3グループに分け、ドラマと原作との関係、ドラマがもたらした反響、そして制作年代の違いによってこれらのドラマがどのように質的变化を遂げたのか、ということについて検討を加える」（p.153-151）。

【2004年〈下半年〉】

『老舎研究会会報』第18号（7月31日）

■本誌20号所収「『老舎研究会会報』総目次（第1号～19号）」参照。

倉橋幸彦編『『全集』以後の老舎著作略目 （1991.1～2004.1）』

老舎『老舎研究会会報』特刊
21頁

◆凡例にならぬ凡例1頁／正文

■『老舎全集』全19巻（人民文学出版社、1999年1月）以降、2004年1月を下限とする、中国で出版された老舎著作略目。収録書目全50点。なお、副題の「1991」は「1999」の誤り。

針谷壮一「老舎の小説に見られる前置詞“対”

の用法」

『國學院雑誌』（國學院大學）

第105号第10号（10月15日）p.1-12

◆§0 はじめに／§1 「コミュニケーションの相手」を導く“対”／§2 「態度・感情の対象」を導く“対”／§3 “对于”から“対”へ／§4 「理解・思考の対象」を導く“対”／§5 「評価の範囲」を表す“対”／§6 「評価・作用の範囲」から“対……来说”へ／§7 おわりに

*「現代中国語の前置詞“対”は、近世白話文学から見られる「～に対して言う」のような用法を除けば、清末から民国期にかけて急速に用いられるようになった語である。現時点では、この前置詞“対”の用法が「いつ」「どのように」発生し普及していったのかは、まだ明らかにされていない。／本稿では、民国期、とくに民国後期の1930～40年代の北方の作家を代表する老舎の作品をコーパスとし、そこに現れる前置詞“対”の用法を通時的な視点から考察する。老舎は、北京で用いられる話し言葉を大胆に取り入れた文体を操ることで知られ、また、民国初期のいわゆる「欧化語法」の発生が一段落した後の、いわば「欧化語法」の普及期ないしは定着期に活躍した作家としても知られる。老舎の作品に見られる前置詞“対”の用法の変遷を詳細に観察することは、民国期の“対”の用法を探るための重要な一部分であり、またこの時期より前あるいは後の“対”用法を観察するときにも一つの大きな足がかりとなるものである。／用例の収集に当たっては、老舎の長編小説および短編小説集の全作品を対象とした」（p.1）。

*「老舎の作品には“対”と“对于”の両方が用いられているが、「態度・感情の対象」で「事物を表すもの」を導く例や、「理解・思考の対象」を導くものでは、のちの作品になるほど“对于”の使用回数は減り、“対”が用いられるよ

うになる。また、「評価の範囲」を導く例では“対”“对于”ともに特に《四世同堂》以降に用例が多くなり、“対……来说”の文型に至っては人民共和国成立以降の作品にしか用例が見られないなど、老舎の作品に表れる“対”の用法は、初期の作品とそれ以降の作品とでは、様相が異なる。／“対”の用法の変化を見ると、老舎の小説は、おおまかな傾向として、《老張の哲学》から《二馬》までは動詞的な性格を強く残しているが、《猫城記》から《火葬》にかけて“対”の前置詞的な性格が現れはじめ、《四世同堂》のころにはその傾向が安定するようになり、そして人民共和国成立以降の《正紅旗》では現在の中国語とほぼ同質であるという印象を受ける。／老舎の最初の作品である《老張の哲学》から民国期最後の作品の《四世同堂》まで、たった二十年ほどの時間にすぎない。このような短期間に“対”の用例がこれだけ変化した事実は、民国期の中国語の変化が非常に大きいものであったことを物語っているといえよう」（p.11）。

杉本達夫『日中戦期 老舎と文芸界統一戦線
—— 大後方の政治の渦の中の非政治』
東方書店 12月25日 310頁

◆序章 日中戦期の老舎と文協を囲む環境／
第一部 文協と文協における老舎の役割／第
二部 日中戦期の老舎の軌跡／老舎・文協関連
年表／あとがき

*「組織された社会の、主席、副主席といった肩書きは重々しい。だが、社会主義の時代に入って、共産党による管理支配が強化されるにしたがい、党外の士である老舎の肩書きは形骸化した。そして文革に際して非業の死を遂げる。老舎は重慶時代に共産党や共産党員について印象を得ていたはずであり、アメリカから帰国の道を選んだ際にも、社会の将来に展望を持っていたであろう。帰国後、共産党が作り出した

社会が予期したものであったのか否か、帰国を後悔することはなかったのか否か、老舎自身はもちろんその類の発言を残してはいない。老舎は創作者としてのおのれを、抗日の大義のためになかば「殺した」。社会主義社会にあってふたたびなかば「殺した」と、筆者には映る。そして文革という異常事態に際して、おのれの肉体そのものを殺したのである」（「序章」p.14）。

[書評]

- ・杉野元子「四半世紀に亘る老舎研究の精華」
『東方』（東方書店）第292号
(2005年6月5日) p.26-29
- ・倉橋幸彦「杉本達夫（東方書店、2004年）
『日中戦期 老舎と文芸界統一戦線——大後方の政治の渦の中の非政治』」
『現代中国』（日本現代中国学会）
第79号（2005年8月31日）p.123-125

【2005年<上半期>】

倉橋幸彦「老舎研究会とわたし」

『トンシュエ』（同学社）第29号
(1月31日) p.11-13

椿 正美「中国演劇と私」

同上、p.13-15

*「今から二十数年前。日中学院別科の受講生だった私は、戯曲の講読や学院祭での演劇公演を中心に活動を進める文芸班に所属していた。初めは中国語の発音の矯正と読解力の養成が主な目的であった。脚本の台詞は私にとって会話文の教材に過ぎなかったのである。／……／このような活動が続けられる間に、私の好奇心は中国演劇の世界へと赴いた。もはや脚本は会話の教科書ではなくなっていた。また、当時在籍していた本科研究科では、牛島徳次先生から老舎作の戯曲『茶館』『全家福』を教材とした

講義を受けていたが、今思えばそれも演劇への関心が高まる要因の一つに挙げられる。やがて本場の中国で実際に舞台を鑑賞したいとの願望も生じ、留学の面接試験用に提出した作文では、迷わず演劇の鑑賞を留学先での活動予定に挙げていた。／昭和五十六年の秋。日中学院の派遣によって私の留学は実現した」（p.14）。

藤澤 全「井上靖の『壺』と老舎の悲劇」

『国際関係研究』（日本大学国際関係学部国際関係研究所）第25巻第4号

（2月28日） p. 153-173

* 「しかしながら、小説『壺』の末尾に「老舎は壺を砕いて死んだと思った」とある。この心中科白者である「私」が即座に脳裡に浮かべる「壺」を砕いたというイメージは、前記した広津和郎が問題にしたこととは次元が異なる。

『壺』の主人公である老舎という悲運の文豪を悼む上で最も含蓄を効かせ、高次の文芸性を担保している。周知のように、毛沢東主席に忠実な文人として自他共に許す老舎が、おりからの文化大革命運動によって指弾にあい、狂奔する紅衛兵の手によって死に追いやられていく…。その凄絶な最後の老舎を作者がイメージするに、老舎は書き継いで来た文学作品と、文学者としての全存在を誰にも穢されることなく守り通し、永遠化を図ったものと直覚、自死はそのための抗議にして、肉体に課した涙ながらの代償であった、との思いを内在させていたことは間違いないようだ。／この場合の「壺」は、例えば、「賢者の石・哲学の石」などといった含蓄の具象ではなく、彼にとっての身命を賭したものの比喩的具象にして、これを砕いたのは、その身命に賭す大切なものを守り、永遠化するための逆説的な行為、換喩による具象の帰結だったことがわかる。従って、この“比喩装置”によって演出を見たカストロフィは、老舎の死報とスパークして「私」の語る喪失劇のから

くりの極まるどころなし、これに付き合う読者に喪失の深刻さを暗示せずにはおかない。おりから中国社会に生じている事態の深刻さと向き合っただらまを組むことの難しさが、作者をしてこのような比喩仕立ての婉曲的場面を構成せしめた、ということであろう」（p. 162）。

渡辺武秀「老舎『火車集』試論 — 戦争表現を巡って」

『八戸工業大学紀要』第24号

（2月28日） p. 171-186

◆はじめに／一. 作品分析の方向／二. 都市が占領され、人々が閉じこめられるという場面設定／三. 漢奸の描き方／四. 戦う人々の描き方／五. 独特な戦争の描き方をしている作品／おわりに

* 「筆者はすでに『火葬』『四世同堂』それぞれの作品については以前考えたことがある。この時の成果を参考にし、つまり『火葬』や『四世同堂』で作品の中に活かされているものが、すでに『火車集』の各作品の中にあることに気がつく。このようであるから、まず、そのような共通部分の幾つかをここにまとめあげ、その後で、その幾つかの共通部分を中心に、『火車集』の作品を分析して行くことにしたい」（p.172）。

辻田正雄「老舎『茶館』札記」

『文学部論集』（佛教大学文学部）

第89号（3月1日） p. 131-147

◆1. 問題の所在／2. 『茶館』の原型／3. 『茶館』の公演と演出／4. 脚本と俳優／5. 『茶館』のことば／6. 老舎と普通話推進キャンペーン／7. 結語

* 「老舎は、中華人民共和国成立後、その時期ごとの政治的任務に応じた作品を書くことを自らの使命と考えていた。『茶館』も例外ではない。『茶館』は普通話推進に呼応して、その

ことばに北京方言はほとんど用いられておらず、規範的である。それにもかかわらず話劇が北京味を感じさせるのは、音のリズムを重視した、俗諺、軽声、儿化の適度な使用によるが、それも多用しているわけではない。老舎が重視したのは作品のことばであり、そのことばの音のリズムである。作品は繰り返し朗読することによって完成稿となった。『茶館』のことばの面での成功も、演出家や俳優を前にした老舎自身の朗読によって可能になったのである」（「結語」 p. 145）。

日下恒夫「老舎のアメリカ時代 — 『鼓書芸人』 覚え書き —」

『関西大学中国文学會紀要』第26号
(3月19日) p. 1-11

* 「ときに1920年代の老舎、1930年代の老舎などという言い方をされるが、そんなにきりのいい年代が作家にとって意味を持つことは少ない。ただ老舎にとって1950年代という年だけは殊のほか深い意味をもつ。1950年を境にして老舎は、アメリカから新しい中国へ、小説家から戯曲作家へ、そして個人主義や自由主義から社会主義へ、さらには祖国と党のための作家へと転身したからである。／人は変化する。作家も同じ。とはいえ老舎の場合は1950年代以前と以後の変化はあまりに急激である。そもそも文学のための文学という面が強い老舎が、アメリカから新中国への帰国と同時に、準備でもしていたかのように政治のための文学に変身した。老舎は2人いるということさえあるほどだ。百八十度の方向転換という不思議な行動については、多くの人がある事実に触れるが、詳細を跡付けた文章を知らない。／このことを考えるにはアメリカ滞在中の仕事を見ておく必要がある。アメリカで老舎はどのような準備をしたのか、そしてそれはうまくいったのか。そのことに関してアメリカ時代の小説『鼓書芸人』を取

り上げてみる」(p. 1)。

* 「そこでおそらく老舎はアメリカにおいて、文人や知識人といったものの社会的な役割について考えたに違いない。それは自分がアメリカを離れて新生中国の作家として生きるためには解決しておかなければいけないテーマであった。／すなわち老舎は知識人や文人など「喫墨水的」(インクや墨で生きる人)の存在意義を小説によって示そうとしたのだ。「インク人間」の値打ちや存在意義は、無知な人、大衆、文字の読めない人を導くという「尊い任務」があると、理想主義的に、素朴に、真面目に考えたのである。むろん老舎は文芸界に入る前は教育界にあったのだから当然といえば当然である。そういった理想が実現できると考えていたからこそ老舎はアメリカ時代以前の作品でも、理想に合わない権威主義、利己主義、出世主義のスノップやいんちき知識人を揶揄し批判してきたのだ」(p. 7)。

* 「こうして老舎は帰国してすぐさま、自らの目で観察した祖国と北京の変貌ぶりや文化状況は彼があらかじめ考えていたものとは違っていることを理解したに違いない。新しい祖国は「先生」など必要としない社会だった。まして文芸の世界は、老舎が創出したつもりになっていた「先生」が何かをなすような世界ではなかった。人民の「先生」はすでにいたからである。人々に成り代わってものを考える「あたま」は党なのだ。／それなら「先生」など破棄するしかない。かくて老舎は「甘い」考えから作り上げた『鼓書芸人』のすべてを、はじめから存在しなかったものとして、「捨て子」にしてしまったのである」(p. 10)。

* 「日下恒夫「老舎“*The Dram Singers* (鼓書芸人)”について」(『関西大学中国文学會紀要』、1996年3月)。なお、その文章の終わりに「待読」と書いてしまったので、遅きに失するが拙文をその続編とする」(「注4」p. 10)。

平岡正明「志ん生「らくだ」と老舎「駱駝祥子」

『アリエス』〔講談社ムック〕2号、3
月25日、p.196-210

→『志ん生的、文楽的』（講談社、2006
年6月23日）p.427-458

*「落語「らくだ」は老舎『駱駝祥子』が終ったところからはじまる。／北京の人力車夫祥子が「駱駝」と綽名されるのは、国民党軍北伐時、地方軍閥に人力車ごと徴発され、山中を逃げまわった末、平地に出たところで、農民が放りっぱなしにした脱毛期の赤むけた駱駝三頭をひっぱって北京に帰ってきたからだった。この駱駝を捨て値の三十五円で売って、一台百円の人力車は買えないので劉四爺親方の車宿に入って損料貸しの車を借りてふたたび北京市中を走るようになってから……と、中国一九三〇年代文学を代表するこの作品を追うのは大変だから、筋だけなら、作中、主人公が述懐する部分をそのまま引用してしめそう。／この手を見る、この足を見る。おれはまだまだ若いんだ、おれは永遠に若者でいてやるぞ。虎妞の命を吸いとり、劉親方の命を吸いとっておれは生きてゆく。愉快に、希望をもって、生きてゆくの。悪人にはみんな天罰がくだり、みんな死にまうんだ。おれの車をとりあげた兵隊どもも、おれに満足に飯を食わせてもくれなかった楊の興さんも、おれをだましおれを尻に敷いた虎妞も、おれを見くだした劉親方も、おれの金を巻きあげた孫刑事も、おれをこけにした陳二奶奶も、おれを誘惑した夏のお妻さんも、みんな、みんな、みんな死にまうんだ。そしておれだけが、正直者のおれだけが永遠に行きつづけるのだ。（立間祥介訳）／祥子は北京郊外の西に生れ、両親は死に、いくばくかの土地も人手に渡って、十八の年に北京に出てきた。身の丈はひとときわ高く、二十歳の頃には入口の戸を背をかかめてくぐらなければならぬほど大きくなって、いろいろ肉体労働をやってみて、人力車

がいちばん金になると知った。劉四爺親方の車宿に身を置いて損料貸しの車を引いて働くこと三年、酒、タバコに手を出さず金をため、九十六円で新古の人力車（注文流れ）を買って独立した。この時が彼の絶頂期だった。／口数が少く、文盲である。健康で力が強く、人柄は誠実である。その男が三十歳にならぬうちに疲れ果て、希望もなく北京の町をとぼとぼ歩いているところで終るのが老舎『駱駝祥子』という小説だ。彼になにがあつたのか。／まず戦争だ。北京に戦争が近づきつつあるある春の日（中略）、いつもなら二十銭で行く清華大学までの客があつた。どの車夫も尻ごみしているのを見て、相手が二円を提示したのをきいて、おれが行こうと名のり出た。人の姿のない大通りを走り、危険を直観して裏通りに入りこもうとしたが、おそかった。十数人の兵隊にバラバラととりかこまれ、人力車は没収、祥子もその場で徴発された。／この場面は落語「蔵前駕籠」を思わせる。官軍が江戸に迫り、旗本の一部が彰義隊を結成して上野の山に立て籠もろうかという時期、ニセ彰義隊、エセ御用盗が江戸の町に出没した。吉原に行く駕籠が狙われた。かかる危急存亡のおり吉原通いとほけしからん。身ぐるみ脱いで置いてゆけ。駕籠に乗る客がいなくなった。そのときに江戸っ子の威勢のいいのが一人、蔵前の駕籠屋に顔を出して、吉原へやってくれ。駕籠かきはだれも尻ごみする。江戸っ子はいついなくなってしまうんだ？ようがす、わつちらが。こんなときに吉原に行くという、お客さんの気ッ腑が気に入らなかつた。そのかわりわつちらも、ギラッと抜いたのが出たら逃げますが、それでよろしいんで。ああ、それでいいよ。待ちねえ、おれも仕度する。客はするすると着物を脱ぐと、フンドシー丁の裸になって、着物と荷物は駕籠の敷物の下にかくして、乗りこんだ。やってくれ。／お客さま、まるで女郎買いの決死隊でがすね。これは有名なセリフ。

ホイ、ホイ、ホイ、日本堤にさしかかろうとするところで一団の侍が出た。駕籠かきは逃げた。われらは徳川の恩顧の者、云々のセリフがあつて、駕籠の垂れをまくってみると、なかに裸の町人が一人。なんだ、すんだあとか。／御用盗を名乗って江戸町人から追剥ぎをするのが江戸侍だから、北京防衛を名乗って車夫ごとと人力車を徴発したのは袁世凱以来の北洋軍閥か。北伐の国民軍が張作霖をおいはらって北京入城したのは一九二八年。／この軍隊は山の中（妙峰山か？）を逃げまわってバラバラになり、祥子が逃げこんだところに主なき駱駝がつながれていて、平地へ出たと知る。駱駝は驃馬よりも力が強く、餌も少なくてすむが、山地では役立たずだからだ。この駱駝三頭を連れ帰ってきたのが綽名の由来である。／『駱駝祥子』が書かれたのは一九三六年である。この年、魯迅死去。中国現代文学のバトンは魯迅から老舎に渡された観のある年である（後略）」（p. 200-201）。
 ＊「こうして軍隊から逃げ帰ってきた祥子はふたたび劉四爺親方のところに身を寄せる。人力車六十輛を所有し、「人和車廠」を名乗る北京一の人力車会社だが、七十歳近い劉親方の不満は跡継ぎの男の子がないことだ。虎妞とよばれる虎みみたいな顔の娘がいるだけ。／戦場から駱駝連れて生還した祥子は人力車夫仲間に英雄視されたが、長くはつづかなかつた。車夫仲間の祝儀不祝儀につきあわず、ひたすら自分の車を買いもどすために金をためたからだ。車夫仲間と肌合があわず、楊家のおかかえになる。／この楊家の奥方というのがケチで人使いがあらう。夫婦の買物とこどもたちの学校送りむかえのために働かれたのに、女中が辞めた穴うめには祥子は家事全般を手伝わされ、ろくに飯を食う時間もない。落語「化物使い」並みの人使いのあらさだ。四日で辞めた。「化物使い」の使用人たちも四日で辞める。先に引用した祥子の述懐のなかに、「おれに満足に飯を食わせて

もくれなかつた楊の奥さん」も天罰が当るべき人間として書き出されているのは、食事の量が足りない、粗末であるというのではなく、食おうとすると用を言いつけられることだ。食いの恨みは中国人は日本人の想像以上である。／そしてこの楊夫人は、四日間使われただけなのに、駱駝祥子にとっていやな女の典型である。俺はここに駱駝祥子と無法松を共通させる鍵があると思う。無法松は女嫌いだった。木賃宿の女将や陋巷の娼婦たちしか知らなかつたから、吉岡大尉未亡人がマドンナとして輝いた。駱駝祥子のマドンナ役は小福子という。弟たちを養うために娼婦になった同じ長屋に住う少女だったが、死んでしまった。俺の見解では小福子は死んだから駱駝のマドンナになったのである。／九州若松の人力車夫富島松五郎と北京の駱駝祥子は、好きで人力車夫をやっている。無法松は社会的上昇の梯子を自らはずしたのである。かつての車引き仲間が北九州工業の発展とともに次々と腰弁解級（勤め人）になっていくのを横目に、彼は木賃宿に独居し、人に使われることを拒む。そういうマッチョイズムは、無法松の美学なのであり、そういうマッチョイズムの必然としての女嫌いである。／駱駝祥子は人力車夫にしかなれなかつたのではない。両親がなく、わずかな土地も人手に渡り、文盲の百姓の俸が都会に出てきて、いろんな肉体労働を経験したのち、自分の頑健な肉体を生かせるいちばんの稼業は人力車夫であり、自分の車を持った独立した俵屋であると方針を定めたのだ。／それはある程度まで老舎の意思をも体現している。その証拠に老舎は人力車夫の中のさまざまな階層、縄張り、年齢による走りかたを描き分けている。一番上が外国人のお傭い車夫だ。これは外国語がわかる。そしてお傭い主お仕着せの制服をつける。開港期横浜でもそうだった。外国人商館主たちは競って自分の車夫に刺青させたために、江戸時代の蛮風として刺青

を禁じた東京を尻目に、治外法権の横浜に腕のいい刺青師があつまった。／北京では二番目が自営の人力車夫で、これが花形だった。白を中心とした粋な仕事着を着こなし、健脚と乗り心地のよさを競った。そのナンバーワンが駱駝祥子だった」（p.202）。

＊「北京の人力車夫下積みの者が、人力車夫会社から日割りで車を借りて働く車夫だ。その中のさらに最下層の者が、道ばたに行き倒れて、笑顔で死んでいる年老いた車夫だ。死んで、やっと苦しみから解放される笑顔を老舎は観察する。／駱駝祥子はかれらに同情しながら、車夫たちの共同体になじまず、身を置かない。おれは若い。力がある。あいつらとはちがう。あいつらとはちがうというところに、自ら車夫を選んだ彼の誇りがあって、それが以後の作品展開を律してゆくのである。／曹先生という人物が登場する。リベラリストの大学教授である。人格者で、祥子は彼を孔子様のように尊敬する。だから引用した怨みの述懐には出てこない。楊家のあと祥子は曹家のおかかえになる。幸運は長つづきしなかった。曹教授がアカとして官憲に追われる。ニセ革命家阮明の密告による。阮明は自分が新思想の持主であることにあまえて学業を怠け、曹教授が落第点をつけたのを怨んで、曹はコミュニストであると密告した。そして情報提供者（スパイ）になってうまうまと役人になった。／曹教授の北京脱出を手伝うべく曹家に戻ったところを駱駝祥子は官憲に捕った。捕えた孫刑事は、かつて彼を車ごと徴発した北洋軍閥の将校だった男で、今は警察官になっている。その男は祥子に、おまえがアカでないことはわかっている。見逃してやる。そのかわり金を出せ、と人力車を買うべく貯めていた金を吐きださせた。このあたりの事情は一九三〇年代の中国の読者には生々しかつただろう。こうして主人公は劉四爺親方の車宿に戻る。つまりふりだしに戻る。／三十過ぎた虎妞がい

る。駱駝に虎が惚れている。酔わせて、誘惑し、肉体関係を結ぶ。虎妞は駱駝を婿にし、父親の会社を継がせたい。腹に枕を入れて、妊娠したと偽る。あたしとあんたは身分がちがうんだよ。結婚したら車引きはやめるんだよ。あたしが父親の全財産を継ぐんだから、夫のあんたは、人力車夫を使う身なんだよ。／父親の劉も内心は駱駝祥子を娘婿にしてもいいと思っている。働きものだ。車夫仲間の押えもきく。俺は劉父娘の感情と方策は自然だと思う。ところが駱駝の方が父娘を嫌うのである。／また車夫仲間も駱駝をおべつか使いだと噂する。あいつのつきあいが悪いのは、娘をたらしこんで父親に近づき、会社を自分のものにしておれたちの上に立とうとしているからだ。このそねみも不自然ではない。／わからないのは駱駝祥子の心だ。なぜかたくななんだ。劉父娘を拒む理由は何だ？／妾馬嫌いのマッチョイズムだろう。無法松がそうだった。北九州の人力車夫たちが次々に勤め人になり、女房をもらって家庭に入つてゆくの、富島松五郎一人、妻帯せず、木賃宿で昔どおり車を引いて日を送っているのは、女嫌いというより「家庭嫌い」なのである。都市下層民が鉄鋼、造船、炭鉱、港湾の上昇期に労働者階級に形成されてゆく過渡期の姿を自らとざして生きる馬喰の子無法松は、家庭と定住が苦手なのである。駱駝祥子は結婚後も自分は人力車を引いて働くということをがんと主張してゆずらず、六十台保有する人力車会社のオーナーになるより、自分の車を所有して町を走ってかせぐことが依然として夢である。その夢を抱きながら彼は天橋の雑踏に出て、大道芸を眺め、屋台のものを食うのが楽しみだ。天橋は浅草みたいところで、北京に生れ北京に死んだ老舎が描写する天橋はうっとりするようであり、したがって、駱駝祥子の眼は老舎の眼である」（p.202-203）。

＊「まさに老舎は平民芸術家である。彼の作品

に、小説でも戯曲でも、落語を思わせるところがしばしばある。ここまできると、無法松や駱駝祥子が一人や二人ではなく、落語に登場する棒手振り商人や職人たちが、明治が鼻先に来ているのに、あるいはもう明治になっているのに、労働者階級へ移行するのを拒むかのように長屋の共同体の喜怒哀楽に固執していたその数が、数万ないし数十万単位で江戸から東京への過渡期にあらわれ、同様に中国の伝統的な社会に、半植民地下の雑民としてとどまり、あえて上昇を求めないでいる層が百万単位でいたのではないかと思わせる。阿Qや駱駝祥子をもって成る窮民の大海が。／劉四爺、虎妞、駱駝祥子の関係は劉大人六十九歳の誕生パーティーで爆発する。面子である。劉四爺は娘が駱駝祥子と肉体関係がありそうだと気づいていた。祥子を娘婿にして自分の会社を継がせるつもりでもいた。それらは父親の承認と祝福のもとに公表されるべきものだった。虎妞も駱駝との関係がのつびきならぬものであることを父親に承認させる機会を狙っていた。そのために、腹に枕を入れて妊娠を偽装もした。娘は公表の機会を父親の六十九歳の誕生日と決めた。劉四爺は父親の面子をつぶされた。／そりゃそうだろう。父親の承認なしに娘が男と通じるのは私通ということになり、それに気づかぬ父親はバカな父親、それを赦す父親は甘い父親ということになる。父娘喧嘩になる。その先が日本人の理解とちがう。父親の怒りは娘を義絶し、金をやらずに放りだす。財産の継承はできなかったが、虎妞は相当の金を貯めこんでいて、長屋を借りて駱駝祥子と新婚生活を始める。夫の飼い殺しである。車を引いて働きたい祥子の希望を封殺する。これも面子である。父親の元を飛びだしたはいいが、食えなくなったから亭主に車を引かせたと巷間に噂されたくない。／ある日、祥子が劉親方の車宿の前を通りかかると見なれた「人和」の名称が「仁和」に変わっていた。劉

四爺が、儲っている会社なのに、他人に売ったのである。自分が死んだあと娘のもとになるくらいなら、他人に売ってしまったほうがよい。／面子をつぶされたことによる父と実の一人娘の、まるで仇同士であるかのごとき争いというのは日本人には理解し難い。儒教的ななにかがあるのか。／祥子と虎妞の住む長屋に人力車夫二強子の家族がいる。その長屋の主人は、巡査、車引き、下男、行商人等の細民で、一室に六、七人が住んでいる状態で、祥子夫婦は飢えていないというだけでそのなかの金持である。二強子は四十代の半ばに達していたので車屋稼業から足を洗いたいと思い、娘小福子を二百円で軍人の妾として売った。女房と娘の小福子と十三、十一の二人の男の子がいる五人家族。二強子は娘を売った金を元手に雑貨の行商をはじめたが、たちまち赤字を出して、酒びたりになる。夫婦喧嘩で女房の腹を蹴ると当たり所がわるく女房は死んでしまった。その葬式代に二強子は車を手放し、祥子が八十円で買った。軍人は半年後、小福子を捨てて他所へ赴任した。小福子は娼婦になって家族を支える。虎妞は駱駝の留守中は、小福子の商売に、一回二十銭で部屋を貸した。／祥子は小福子に同情した。小福子は祥子を頼りにした。虎妞は嫉妬した。よくある話だが、祥子と小福子には肉体関係は最後までないというのはよくある関係ではない。ドストエフスキー『罪と罰』におけるラスコーリニコフの娼婦ソーニャへの肉体関係なき同情は学生ラスコーリニコフの狂った観念のためであり、無法松の吉岡未亡人良子に対する肉体関係なき恋心は、身分ちがいと心得る無法松の自制によるが、そして未亡人良子と一子敏雄に対する松五郎の後見人的な位置はかつての鳶頭を思わせるものになってゆくが、駱駝祥子の小福子に対する肉体関係なき同情は、同じ長屋に住む人力車夫と娼婦のつきあいだから、身分ちがいとか自制とか奇妙な観念による抑制

といったものではない。老舎はチラと書いている。／「祥子はなにも知らなかったが、おちおち眠ることもできなかつた。虎妞が、小福子の面倒を見ると同時に(小福子の商売に部屋の時間貸しをすること、の意)、自分でも失われた青春を祥子のからだからとりもどそうとするようになったからだ」／すなわち駱駝は女房に吸いとられて小福子にまわす分がなかつたのである。なんとリアルな、そして落語的な観察か。／虎妞は妊娠する。臨月になる。お産に失敗して母子ともに死ぬ。祥子が天罰を受けるべき一人としてかかげた陳二奶奶は、おまじないをして大金を吸いあげた五十がらみの呪術師である。蝦蟇仙人の再来と自称するペテン師で、この女にひっかかり、さらに虎妞の葬式代を支払うために祥子は人力車を売った。／自前の車がなくなつたのでお傭い車夫にもどる。夏先生という役人が主人だ。十二人の子だくさんで夫人とこどもたちは河北省保定に住んでいる。北京住いの夏先生は雍和宮近くに別邸を構え、妾を住わせた。この妾は美人だが、淫蕩で、五十過ぎた夏先生ではもの足らず、駱駝にちよつかいを出した。駱駝はこの女に淋病をうつされた。車夫たちが煉瓦塀に片手をついて痛そうに小便をしている光景を駱駝がわがことのように眺めている描写がある。／だから祥子は彼女を「おれを誘惑した夏のお妾さんも、みんな死んじまうんだ」と呪っているのだが、これはいささか不当である。虎妞のように、彼を夫にし、父の財産をひきつぐために狙って、妊娠まで装ってはめたのではなく、好きものの妾につまみ食いをされて、駱駝もいい目を見たのだ。彼は女嫌いであるが、聖人君子ではないことがこれでわかる。彼のマッチョイズムが性的領域においてもすこしずつゆるんでいっているのである。結果は、身体が資本の人力車夫が性病になってしまつてはたいへんな痛手だ。／虎妞、劉四爺、兵隊ども、楊夫人、孫刑事、陳二奶奶、

夏の妾、と駱駝は自分に不運をもたらした人物を次々に呪い、曹教授、小福子など「肯定的人物」(という社会主義リアリズムの語を使つておくが)のことはもちろん呪わず、「正直者のおれだけが永遠に行きつづけるのだ」と自分の半生をふり返つたのであるが、この場面は、たまたま彼が乗せた客が年老いた劉四爺であり、依然として金持ちではあるが、事業から手を引き、娘に逃げられ、老後の孤独に生きている老人に対するあざけりの気持ちのあと、「この手を見ろ、この足を見ろ」と手前勝手に昂奮している場面なのである。駱駝祥子はそういういやなエゴイストに転落しつつある。娘婿と認めて劉四爺はたずねる。「娘は?」「死んだ」「どこへ埋めたんだ?」「知つたことか。降りろ老いぼれ」。駱駝祥子は河豚に当つて死んだわがらくだの馬さんに近似しつつある。／こんなものは覚醒でもなければ勝利でもない。中国の作家はあまくないと思うことは、これは魯迅の言をそのまま老舎にあてはめられるのだが、絶望の虚妄なること希望の虚妄なるごとしというやつだ。女房も家も車も健康も失つて、なお絶望が身につかない。自分の嫌っていた相手の不運を見て、自分に希望を感じて、あるいは錯覚してしまう。／ぐうたら生活から立ち直ろうと、祥子は尊敬する曹教授の邸を訪ねる。ニセ革命家の阮明に密告された曹教授は上海に逃げ、ほとぼりをさまし、阮明も役人に成り上つておとなしくなり、曹教授が北京に戻つてきていることを祥子は噂で知つていた。曹はもう一度自分のところに戻つてこいと言つてくれた。／祥子は薄幸の娘小福子のことを話した。曹教授はその娘をひきとつて小間使いに傭つてもよいと言つた。祥子は長屋に戻つた。小福子はいなくなつていた。駱駝は絶望した。絶望して曹教授のところに戻らなかつた。／これも祥子のエゴの結果である。彼は虎妞が死んだのちぶいと家をとびだし、自分が小福子を絶望させたことに

気づいていない。女は自分を待っているものと都合よく考えていただけである。小福子は最下層の娼婦に墮ちていた。北京郊外のクリークわきのじめじめした小屋を探しあてて駱駝祥子がたずねると、小福子は、だいぶ前に林の中で首を吊って死んでいた。／希望と絶望があざなえる縄のようからみあうこの小説は、一九三〇年代になっても、『淮南子』人間訓「塞翁が馬」の故事が中国人の思考に染みついているのかと思わせる。ちがうところは、希望と絶望が縄目をつけながら、一つ結節の毎に、毒が全身にまわってゆくように、破局に向ってゆくということである。／最後のページで駱駝祥子は廃人になる。仲間の仕事を横どりするようになる。車も引けなくなる。婚礼や葬式の列に加わって、傘、花輪、旗などをかついでのろのろと行進して、何枚かの銅銭を貰う。／「……いつかは、どこかに、彼自身を埋めることになるはずだ。この墮落した、我利我利亡者の、不幸な、病める社会の胎子、個人主義のなれのはてを！」／あと一行想像してよろしいか老舎先生。こうして駱駝祥子は日本に来て河豚食って死んだ」(p. 205-207)。

*「明治二十三年生れで、昭和四十八年に亡くなった古今亭志ん生の八十三年の生涯は、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、シベリア出兵、満洲事変、日中戦争、太平洋戦争、出兵はしていないが米軍の後方基地になった朝鮮動乱、同じくベトナム戦争と戦争史への「フルエントリー」(軍隊経験なしだが)だ。／どの落語のどの部分が、どの戦争に重なるなんてことはわからないが、志ん生が「らくだ」の前後通し篇、昭和四十一年一月の紫綬褒章受賞高座の枕に、日本敗戦・満洲帝国消滅時の大連を和服下駄履きで歩く自画像を振ったときに、彼の脳裡に大陸で実際に見たであろう駱駝と、老舎『駱駝祥子』が浮かんでいるように思うのだ」(p. 208)。

*「志ん生が老舎を読んでいたかどうかはわからない。が、大陸帰還者のファンのだれかと、この小説の話をしたことはあると思っている。この小説は落語になるね、と志ん生は言ったのではないか」(p. 210)。

*「侍の末裔に支那小説はピタリだ。鳥籠の横に煙草盆とページをひらいた『駱駝祥子』もあって、刻一刻、主人公が墮落して行く逆教養小説ともいうべき作品を、主人公の最後のページに立って笑っているような古今亭は、おい、ことによると老舎よりすごいやつかもしれないぞ」(p. 210)。

■なに、荒唐無稽、それを言っちゃおしめえよ。『駱駝祥子』の見事な読み手、平岡清明はいたってまじめ。それに絆されて、オイラの引用もついつい長くなっちゃった。

菱沼 透「感動詞“哎呀”の機能—老舎話劇における用法」『創大中国論集』(創価大学文学部外国語学科中国語専攻)第8号(3月31日) p. 1-12

◆1. はじめに; 1.1. 感動詞“哎呀”・1.2. テキストとコンテキスト/2. 当事者としての発話; 2.1. 外的刺激に対応する“哎呀”・2.2. 身体内の刺激に対応する“哎呀”/3. 観察者としての発話/4. 発言者としての発話/5. むすび

*「老舎の話劇のテキストは、『老舎劇作全集』(共四巻、中国戏剧出版社)を用いた」(「【注1)」 p. 12)。

本誌19号の訂正と追記

p. 1の左7行目の「1983年3月」を「1986年3月」/p. 15の左22行目と27行目の「**基**く」を「**基**づく」/p. 16左22行目の「**是**」→「**很**」を「**很**」→「**是**」/に訂正。

また、p. 13とp. 14の写真はいずれも「森本まみ子会員提供」であることを追記します。

“補白”老舎（４）

辛 彦

吉田東祐の『日華問題の全面的解決の爲めに』（中日文化研究所出版・申報社（上海漢口路 309 号）、中華民国 32 年 12 月 31 日）を読んでいたら、その中の一編、「支那料理論」と題する文章に興味を引かれた。

吉田東祐は、この一文で「支那料理」文化論を展開しながら、「支那料理の多様性の中に中国語千年の飢餓史が織り込まれてゐる」ことを説き、当時の中国社会の分析をも試みているのであるが、そこに林語堂とともに老舎が引かれている。

日本語で老舎について言及したものとしては、かなり早期のものであると思われるので、少し長くなるが、その個所を次に書き記しておこう（なお引用に当たっては、漢字を新字体に改めた）。

支那料理の献立が如何に人間の胃の臓を無視してゐようとも夫は所詮中国の社会機構の必要に基づいて起つたものである。中産階級の少ない此の国では支那料理を専門に食ふ階級と共にその食ひ残しによつて養はれてゐる乞食階級が他の国よりもきわだつて多い。中国人は支那料理の分量と多様性を世界一と誇ると同時にその食ひ余しに養はれる乞食階級の数も亦た世界一であることを認めなければなるまい。支那料理を専門的に食ふ階級とその残物によつて養はれる階級は其の地位に於て天地の差異はあるが政治的には相互に依存關係を持つ。前者は食ひ残しの量を増すことによつて乞食階級を買収し、中産階級（生産階級と言つた方がよいかもしれない）の民主々義運動に対する反動的ブレーキとして利用する。乞食階級に墮落した老舎の「駱駝祥子」は「何々運動、何々

請願團…何でもよい、十仙でも三十仙でも金さえやれば何でもやつた」と謂ふ。軍閥やそれを背景とする高利貸資本家は、之等の、金さへやればなんでもする反動的乞食階級を便利な支持者とする。民族革命の目的の一つは先づ此の反動的乞食階級を生産的階級に転入させ、彼等を支那料理の残物よりも自らの額に汗して獲得した焼餅や油塊の方がどれだけうまいかを教へることであらう、一方に於ては支那料理の分量と多様性をもつと人間的なものとし、それと同時に一般民衆の食物を異なる意味に於て人間的なものとすることも革命目標の一つでなければならぬ。

ここに引かれた老舎「駱駝祥子」は、同小説第 23 章の最後の段落の一節であるが、今これに関わる原文を以下に示すと、

什麼公民團咧，什麼請願團咧，凡是有人出錢的事，他全幹。三毛也好，兩毛也好，他樂意去打一天旗子，随着人羣亂走。

ところで、『日華問題の全面的解決の爲めに』は、「著者序言」によると、吉田東祐が中国文で『『申報』の日曜論壇に執筆』したものを纏めた「論文集」で、先に「中国語で申報社から出版」され、それとほぼ同時に出た日本語版なのである。

今、筆者には吉田東祐「支那料理」（昭和 18 年 9 月 17 日）の中国語原文を確認するすべをもたないが、『駱駝祥子』からの引用の日本語訳に当たっては、竹中伸訳の『駱駝祥子』（新潮社）の初版（昭和 18 年 3 月 20 日）あるいは再版（同年 6 月 10 日）を参考にしたことはほぼ間違いない。

竹中訳を次に引き、上に引いた「支那料理論」と比較されたい。

何々運動、何々請願團……何でも好い。二十仙でも、三十仙でも金にさへなれば何でもやつた。（p. 408）

老舎通信

◇中山時子先生、中国老舎研究会の名誉顧問に

中山時子先生は、2002 年 11 月に中国人民対外友好協会から「中日友好使者」の称号をすでに授与されておられますが、昨年 7 月聊城で開かれた第四届老舎学術討論会において、今度は中国老舎研究会の名誉顧問に御就任されることになりました。言うまでもなく、外国人としては初めての快挙であります。

◇舒乙：〈中山時子的 10 個“第一”〉

中山時子先生のこれまでの御功績を、舒乙氏が標題の文章で、以下の 10 条にまとめて讃えています（なお詳細は、中国老舎研究会の「網頁」www.laoshexue.comを参照下さい）。

1. 世界で最初に老舎読書会を組織した。
2. 柴垣芳太郎先生とともに、世界で初めて老舎研究会を提唱設立した（現在では世界に四大老舎研究会がある。日本老舎研究会・中国老舎研究会・北京市老舎研究会・欧州老舎愛好者友人協会）。
3. 世界で最初の『老舎小説全集』（学研）を企画出版した。
4. 世界で最初の『老舎事典』を編集出版した。
5. 数次にわたる訪中団を率いて、老舎先生の足跡を追い北京、済南、青島、武漢、重慶等を実地調査し、大部の写真集を出版した。
6. “祥子の旅”という名の文化旅行プログラムを発案実施した。
7. 中国老舎研究会の学術年會に一度も欠かさず出席。
8. 日本の学術界で募金活動を行い、北京の“老舎故居”の修復に巨額の援助をした。
9. “美食家”であると同時に、中国の食文化に造詣が深く、関連著書も多い。「举世無双（比類なき）」“老舎迷”である。
10. 経験豊かな教授であり、まさに「桃李滿天下」である。（X）

事務局便り

◇2006 年度大会は 8 月 1 日〔金〕に、大阪駅前第三ビル大阪産業大学梅田サテライト教室で開催されました。

◇当日の発表者とテーマは次の通りです。

布施直子：2006 年夏、山東 ―

第四届国際老舎学術討論会

櫻井龍彦：妙峰山廟會に集う人びと ―

復活した民間の信仰組織「香會」について

平松圭子：老舎「末一塊錢」と C.Y.Lee

“Mr.Weng’s Last Forbidden Dollar”を読む

◇今号の編集では、サバティカルで英国滞在中の高橋由利子会員に無理をお願いし、「ロンドン通信」をご寄稿いただきました。／日本では「♪千の風になって」が流行りましたが、それをものともせず、英国でのお墓探し談です。それにしても、高橋会員の^{フットワーク}機動力の軽さにはただただ脱帽。／余談ながら、サバティカルとは良い制度ですね。特に大学のサバイバルをかけて「多忙の極み」である編集子などにとっては羨ましいかぎりです。

◇今号も、20 号に引きつづき 20 頁立てにしました。それだけ多くの原稿が集まったというのではないのですが、これを一つの定型とするための足掻きとご理解下さい。会員各位の奮っての投稿をお待ちしております。

◇今号の校正・印刷も好文出版のお骨折りによります。心より感謝するとともに、今後とも老舎研究会をお見捨てにならぬようお願いする次第です。（C）

老舎研究会会報第 21 号 (2007 年 9 月 1 日)

〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35

関西大学中国語中国文学（日下）研究室

老舎研究会事務局

TEL：06-6368-1121（代表）

